

『デザイン学論考』全15号を振り返って

Reflection on fifteen issues of "Discussions on Studies of Design"

北 雄介

KITA, Yusuke

京都大学大学院横断教育プログラム推進センターデザイン学リーディング大学院 特定講師
『デザイン学論考』編集長

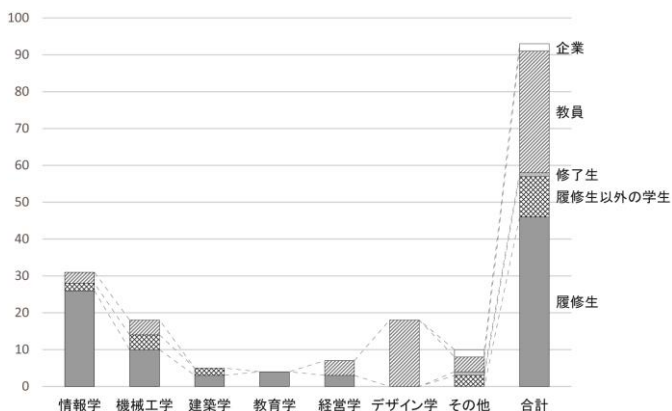


本誌『デザイン学論考』は、このvol.15をもって最終号となる。わずか5年間ではあるが、この間に77もの質の高い論考をお寄せいただき、誌上での活発な議論が行なわれた。そこで本稿では編集長を仰せつかっている筆者の視点から、デザイン学論考の全15号を振り返るとともに、本誌に関する経緯や考えを綴っておきたい。

1. 論考の一覧から

これまでに本誌に掲載された論考を、号順・掲載順に並べたのが次頁のtab.1である。合計77本（「デザイン学論談」などの報告記事を除けば73本）の原稿が寄せられた。中には3本のみの掲載に留まった号もあるが、平均すると1号あたり約5本の論考が寄稿されたことになる。

執筆者の内訳（所属と学生・教員などの別）をfig.1にまとめてみた。本誌は、デザイン学プログラムにかかわる人であれば立場を問わず自由に論考を発表できる開かれた場であるが、結果的に履修生が執筆者の半数を占めた。本誌は、学生たちがデザイン学について思考し、ボトムアップにこの学問を築き上げていく媒体になってほしいと考えて立ち上げられた。その意味では多くの学生が論考を執筆してくれたことは、誠に幸いなことであった。創刊号では原稿を書いてくれそうな学生に内々に声をかけることでスタートしたが、号を追って、学生たち自らがどんどんと投稿してくれるようになった。留学生による論考も9本にのぼる。創刊当初は日



※第二著者以降を含む。「デザイン学論談」などの報告記事を除く

fig.1 執筆者の内訳

本誌のみのタイトルが並んでいるが、vol.7のVictoriaさんの原稿を皮切りに、留学生からも積極的な寄稿をいただくようになった。

さて、論考の内容について見ていこう。大まかな傾向を知るために、各論考で記された主な内容を大きく4つのカテゴリーに分類し、集計してみた（tab.1右端列およびfig.2）。実際にはワークショップや視察を起点に持論を大きく展開するような論考なども存在するため、一意に分類してしまうのは甚だ乱暴ではあるが、どうかご容赦いただきたい。

もっとも数が多い、持論や自らの研究に関するカテゴリーには、特定の学問分野に囚われない実に多様な内容が含まれ、本誌の性格を物語っている。それぞれの専門分野での研究を語る場合でも本誌では、多くの分野の読者に伝わりやすい、あるいは分野外の人に対しても何らかの問いを提起するような文章になるよう配慮いただいている。自分の直接の研究対象ではないテーマについて、自由に考察を繰り広げる論考も多い。本誌の周君、佐伯さんやLuciano君の原稿がそのよい例で、いずれも読み応えのあるものに仕上がっている。本誌が、思考の幅を広げるための格好の舞台になっているのではないかと感じている。

次に多いのが、プログラムで行なわれる実習やワークショップイベントに関連するものである。筆者自身、実習やワークショップはやりっ放しで終わるのではなく、そこから何を考えて何を得るかが重要だという考えを本誌で繰り返し述べている（vol.5, 6, 7）。このカテゴリーの論考の数を見ると、本誌がそのような思索の場として有効にはたらいっていることを実感する。実習やワークショップを進める中で何を工夫し、何に苦しみ、どんな考えに至ったのかがありありと綴られている。特にサマーデザインスクール2015の後には、その参加者や実施者から、vol.5, 6, 7の3号で合計9本もの論考が寄せられた。中小路先生と藤田さん、岡君（「図鑑」のテーマ）、そして大倉君と寺川君（「きかい」のテーマ）などは、同一のテーマワークについてそれぞれ独自の視点から論じており、その違いも興味深い。筆者個人も、サマーデザインスクールのデータ分析を1期生の坂口君、久富さん、佐藤君とともに展開してきた（vol.6, 9, 10）が、これも本誌という自由な発表の場がなければなかなか前には進まなかっただろうと思う。

海外視察や学会に関する論考も数多い。特に中小路先生が主導されている米

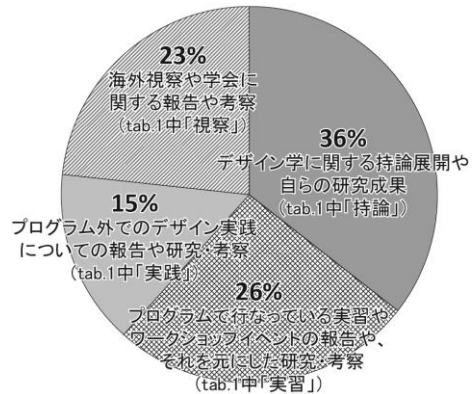


fig.2 論考の主要な内容の内訳

ⁱ デザイン学プログラム関係者にとってのわかりやすさを重視し、本稿では英語表記の留学生の名前はファーストネームで記載する。

tab.1 論考の一覧

※所属は執筆当時。デザイン学プログラムの参画部局に所属の学生・教員については、便宜的に「情報学」「機械工学」「建築学」「教育学」「経営学」「デザイン学」と表記。

※学年は執筆当時。期生とはデザイン学プログラムにおける世代（1期生～6期生）で、時期によって変わらない。学年は学生のみ、期生はプログラムの履修者・修了生のみについて記載。

※「デザイン学論談」などの報告記事については、文責の氏名のみ括弧書きで記載。

号・年月	No.	タイトル	執筆者	所属	学年	期生	分類
vol.1 (2014.7)	1	長期的デザインプロセスモデルに基づくデザイン論の問い直し	北 雄介	デザイン学	-	-	持論
	2	<ことば>のデザイン 伝わらない<ことば>を巡って	荒牧 英治	デザイン学	-	-	持論
	3	“デザインの場”の設計とコラボレーション - 京都大学附属図書館ラーニングcommonsのデザイン -	太田 裕通	建築学	M2	1	実践
	4	関いとしてのサービスのデザイン	山内 裕	経営学	-	-	持論
	5	デザイン学論考	井上 裕昭	情報学	M2	1	視察
	6	デザインにおける<スケッチ>のスケッチ的考察(その1)	中小路 久美代	デザイン学	-	-	持論
vol.2 (2014.11)	7	デザイン評価における意思決定のモデル化と可視化に関する考察(DCS 論考Ⅰ) - 2013年度京都大学建築学科卒業設計講評会を事例に -	太田 裕通	建築学	M2	1	持論
	8	プロジェクションマッピングを用いたカフェ内感想交換システムの提案	長見 祐暉 牛山 あやか 平敷 友亮 伊藤 優也 山口 祐也	機械工学 建築学 情報学 情報学 経済学	M1 M1 M1 M1 B4	2 - - - -	実習
	9	都市のあの「感じ」は情報になりえるのか	北 雄介	デザイン学	-	-	持論
	10	ソフトウェアシステムのデザイン	中小路 久美代	デザイン学	-	-	持論
	11	「社会のデザイン」への挑戦	佐藤 那央	経営学	M2	1	持論
	12	社会をデザインする: 予備的考察	山内 裕	経営学	-	-	持論
vol.3 (2015.3)	13	生活の質(QOL)のデザイン	富田 直秀	機械工学	-	-	持論
	14	コミュニティのデザイン	平本 毅	経営学	-	-	持論
	15	2015年度 新入生合宿のデザイン	阿部 将和	情報学	M2	2	実習
	16	ロンド(主題:創造性教育) 対談記録	(富田 直秀)	-	-	-	-
	17	第1回「デザイン学論談」レポート	(北野 清晃)	-	-	-	-
	18	サマーデザインスクール2015 -その次へ	北 雄介	デザイン学	-	-	実習
vol.4 (2015.7)	19	京都の中小・ベンチャー企業の魅力を学生に伝える方法をデザインする	平本 毅	経営学	-	-	実習
	20	「動かない自動車を活用するデザイン」のテーマ実施を通じて	平岡 敏洋 大場 紀章	情報学 株式会社テク ノバ	-	-	実習
	21	愛と情熱(=変態性)にみるモノづくりの真髄	藤田 弥世	教育学	D1	1	実習
	22	なぜ私たちのテーマは独創的であると判断されたのか -サマーデザインスクール2015に参加して-	岡 隆之介	教育学	D1	1	実習
	23	第2回「デザイン学論談」レポート	(太田 裕通、佐 藤 那央)	-	-	-	-
	24	素人徒然帖:SDSテーマ「きかいな住まい、京都にて。」を実施すると いふこと	大倉 裕貴	機械工学	M2	2	実習
vol.5 (2016.1)	25	実施者という役割、私たちのリーダーシップ	寺川 達郎	機械工学	M2	2	実習
	26	京都大学サマーデザインスクール2015のデータ分析を通じた「ワーク ショップ」考	北 雄介 坂口 智洋 佐藤 那央	デザイン学 情報学 情報学	- D1 D1	- 1 1	実習
	27	物語の可視化(逐次型弁証法による発見支援)	富田 直秀	機械工学	-	-	持論
	28	SDS2015「図鑑のワークショップ」について	中小路 久美代	デザイン学	-	-	実習
	29	On re-designing Okinawa-city	Victoria Abou Khalil	情報学	M2	3	実習
	30	続・「ワークショップ」考 ～「京都大学-香港バプティスト大学合同デザインスクール2016」の現場から～	北 雄介	デザイン学	-	-	実習
vol.6 (2016.3)	31	意味があれば価値があるだろうか	富田 直秀	機械工学	-	-	持論
	32	デザイン学会春季研究発表大会報告記	坂口 智洋	情報学	D2	1	視察
	33	第3回「デザイン学論談」レポート	(佐藤 那央)	-	-	-	-
	34	US Design Tour Report	Jian Guo	情報学	M2	4	視察
	35	Things I Have Learned from U.S. Design Exhibition and Research	Rachana Nget	情報学	M2	4	視察
	36	米国における自律性の醸成と尊重	市村 賢士郎	教育学	D2	1	視察
vol.7 (2016.7)	37	工房の分類と活用についての考察 ～訪問学習会USでの体験から～	島田 一希	情報学	M1	4	視察
	38	コロラド大学アイデアフォーエジ訪問記	白石 晃一	デザイン学	-	-	視察
	39	KDnS訪問学習会2016秋USを実施して	中小路 久美代	デザイン学	-	-	視察
	40	2016年度飛行ロボットコンテスト活動記録	服部 祥英	機械工学	B2	-	実践

号・年月	No.	タイトル	執筆者	所属	学年	期生	分類
vol.9 (2017.3)	41	クリストファー・アレグザンダーの諸活動に見る、デザイン方法論のバースペクティブ	北 雄介	デザイン学	-	-	持論
	42	近いシステム・遠いシステム	喜多 一	国際高等教育院	-	-	持論
	43	実施者の振る舞いはワークショップの成否を左右するか？ —京都大学サマーデザインスクール2016のデータ分析 (1)—	久富 望 坂口 智洋 北 雄介	情報学 情報学 デザイン学	D3 D2 -	1 1 -	実習
vol.10 (2017.8)	44	6つのプレストバトル対抗戦実施報告 —「産学連携バトル！ in Kyoto」におけるワークショップより—	久富 望	情報学	D3	1	実践
	45	Webサービスの亡霊のゆくえ	小山 純汰	情報学	D1	3	持論
	46	参加者は何を期待し何に満足しているのか —京都大学サマーデザインスクール2016のデータ分析 (2)—	坂口 智洋 久富 望 北 雄介	情報学 情報学 デザイン学	D3 D3 -	1 1 -	実習
	47	デザインプロセス全体を複雑なまま構造的に記述する試み	北 雄介 坂口 智洋 久富 望	デザイン学 情報学 情報学	- D3 D3	- 1 1	実習
vol.11 (2017.12)	48	アーティストたれ！	寺川 達郎	機械工学	D2	2	視察
	49	The American Way of Design	Luciano Henrique de Oliveira Santos	情報学	D2	2	視察
	50	アメリカでのデザインに対する取り組み	広瀬 貴之	機械工学	D1	3	視察
	51	アメリカ訪問学習会2017秋US 番外編 私たちはなぜデザインを学ぶか	広瀬 貴之	機械工学	D1	3	視察
	52	リーダー集団に必要なリーダーシップとは —「産学連携バトル！ in Kyoto」を通して—	久富 望 鶴羽 愛里 塩山 卓月	情報学 総合生存学館 総合生存学館	D3 D1 M2	1 - -	実践
vol.12 (2018.3)	53	ワークショップの実践的知識 (1) —自己紹介をどのように始めるのか—	北野 清晃	情報学	D3	1	実習
	54	「デザイン」の実践の場 —訪問学習会2017秋USを通して—	小椋 恵麻	建築学	D3	1	視察
	55	デザインにおける個と集団	北 雄介	デザイン学	-	-	持論
	56	2017年度飛行ロボットコンテスト活動記録	服部 祥英	機械工学	B3	-	実践
	57	飛行ロボットコンテストを経て	松本 健吾	機械工学	B3	-	実践
vol.13 (2018.9)	58	飛行ロボットコンテストに参加してみて	佐野 佳則	機械工学	B3	-	実践
	59	Towards Transferring a Borderless Aspect: Freedom	Kensuke Abu Kargbo Morris	情報学	D1	3	実習
	60	インタビュー：地面について	北 雄介	デザイン学	-	-	持論
vol.14 (2018.12)	61	第2回スマートディスティネーション国際会議参加報告	笠原 秀一	学術情報メディアセンター	-	-	視察
	62	レイヤー思考とパースペクティブ思考	松原 厚	機械工学	-	-	持論
	63	リサーチインターンシップinドイツ	森 幸太郎	機械工学	D2	3	視察
	64	福島のと京都にいる自分：FBL/PBLでの覚書	大手 信人	情報学	-	-	実習
	65	“The Value of Human Rights on the Camino de Santiago” に参加して	笠原 秀一	学術情報メディアセンター	-	-	視察
vol.15 (2019.2)	66	日本におけるグラフィオロジー成立の背景に対する考察	佐伯 和香	経営学	M1	6	持論
	67	つくらないスタジオ	大倉 裕貴 岸本 裕大 寺川 達郎 森田 瑞穂	機械工学 機械工学 情報学 有限会社IQ	D3 D3 D3 -	2 2 2 -	持論
	68	柳川堀割「ウナギ物語」にみる、地域活動コミュニティについての考察	堀 友彌	情報学	D3	1	実践
	69	観光データでデザインするための営み	佐藤 彰洋 笠原 秀一	情報学 学術情報メディアセンター	- -	- -	視察
	70	Designing to improve student completion rates: Preliminary qualitative investigation into causes of drop-out	Agustina Lucía Yohena	教育学	M1	6	持論
	71	Organizing a Competition on Tackling Youth Unemployment	Samar Helou	情報学	D3	2	実践
	72	コ・ファシリテーションの試行 —実践の中で他のファシリテーターから学ぶ—	北野 清晃	ワークショップ デザイン研究所	修了	1	実践
	73	氷山の一角に最大の表現力を —『乃木坂って、どこ？』から考える伝え力のある番組の作り方—	周 文卿	情報学	M2	5	持論
	74	書字方向が定着した背景についての考察 —中国語、ヒンディー語、英語—	佐伯 和香	経営学	M1	6	持論
	75	Reflections on the invisible	Luciano Henrique de Oliveira Santos	情報学	D3	2	持論
	76	「木津川探検ワークショップ」から考えた子ども向けワークショップのデザイン	安藤 悠太	機械工学	D1	4	実践
	77	『デザイン学論考』全15号を振り返って	北 雄介	デザイン学	-	-	持論

国への訪問学習会については、2年間で合計11本の原稿が掲載された（vol.8, 11, 12）。こうした訪問も無論、実習やワークショップと同様に、行って終わり、見て終わりではない。

デザイン学プログラム以外での実践活動では、工学部の学部生である服部君らによる「飛行ロボットコンテスト」に関する原稿（vol.8, 12）は毎年大作で、機体の進化過程や彼ら自身の葛藤が見て取れる。プログラム履修生でないにもかかわらずデザインファブリケーション拠点のヘビーユーザーとなり、こうして本誌にも原稿を寄せる彼らの姿は、デザイン学というものがプログラムの枠を超えて広く開かれる理想像を思い起こさせてくれる。またvol.1の太田君の原稿は、FBL/PBLをきっかけにして半年で附属図書館のラーニングコモンズをすっかり変えてしまったというプロジェクトを報告している。デザイン学の試みを起点に実際に社会を変えたという、プログラム初期における一つのエポックであったように思う。竣工5年が経過した今、ラーニングコモンズは常に学生が溢れ、キャンパス内の集いの場としてすっかり定着した感がある。

サマーデザインスクールや飛行ロボットコンテストの他にも、同じテーマについて連続していくつかの論考を出すパターンが多いのも、本誌の特徴の一つであろう。久富さんらによる「産学連携バトル！ in Kyoto」を元にした考察（vol.10, 11）、北野さんによるワークショップ分析（vol.12, 15）、笠原先生と佐藤先生による観光産業に関する議論（vol.13, 14, 15）、佐伯さんの文字論（vol.14, 15）などである。さらに面白いことに実際の論考を読んでも、自分で書いたものだけではなく他者の論考を引用・参照している事例もかなり多かった。以前の論考をベースにして論述を始めた、その考えを発展させたりするような動きが執筆者をまたいで行なわれたのである。vol.6で寺川君によって示されたリーダー論をvol.11で久富さんが引き継ぎ展開したのが、その典型的な事例である。本誌が、個々が好き勝手に考えを発表するというだけではなく、執筆者同士がインタラクションを起こし、協働的に学問を構築するような場になっていたのではあるまいか。

2. 『デザイン学』への問いから

原稿の最後には、『デザイン学』への問い」というコーナーを設け、執筆者の方に何点かの問いを挙げてもらった。問いの内容は論考を要約して得た課題でも、その内容に関連したより大きな枠組みでのものや、論考から飛躍した疑問でもよく、特に制限を設けていない。各々の論考の核心を示していただくとと

もに、「デザイン学」という新たな学問領域において何が問いうるのか、何を知りたいのかを、短いセンテンスで収集してみたいというのが、編集長の私としての狙いであった。「デザイン学」とカギ括弧を付した表記にも、この学問を確立されたものとしてではなく、いったん未知のものとして疑ってみよう（文字通り括弧に入れてみよう）という意図がある。

73の論考から、133もの問いが挙げられた。これについては、あらかじめいくつかのカテゴリーに分けた上で列挙してみよう（tab.2。カテゴリーはA～Kとして表記）。それぞれの問いには豊富な含意があり、先の論考の内容の分類と同じく便宜的なものでしかないことには留意されたい。とはいえデザイン学に関する論点をボトムアップに収集しようという狙いからすると、このtab.2自体が実は、筆者が密かに作成を目論見続けてきた一覧表である。問いのあまりの多様性に圧倒される感がなくもないが、分類に基づいて少し詳しく見ていこう。

A（ビジョンや思想）、B（実践的方法やプロセス）、C（記述、表現、伝達）、D（評価）については、デザインのステップになぞらえて理解できる。つまり、まず現在の状況がどのようになってほしいのかというビジョンや思想に基づき、何らかの方法やプロセスによって、デザイン行為を実行する。そのデザイン行為は社会に開かれた行為であるため、デザインの意図をどのように表現したり、人に伝えたりできるのかが重要になる。デザイン行為が成功したのかを測るため、またうまくいくのかをあらかじめ判断するためにも、評価のための観点や方法が必要となる。というような流れである。

意志決定や評価に対していかに理に適った方法でアプローチできるかという問いが、多数挙げられているのが印象的である。デザインにおける「価値」に関しては、Hの抽象概念に関する問いの中にも見られる。またBの実践的方法やプロセスのカテゴリーには、英語での問いが顕著に目立つ。筆者が担当した国際ワークショップでも大概、デザインを前へ前へと押し進めるのは留学生で、立ち止まって考えるのは日本人学生であったことを思い出す。

タイトルを並べたtab.1ではワークショップや実習に関する論考が約1/4を占めたが、tab.2の問いにおいてはその比率を減らしている（E）。ワークショップや実習を起点に、より一般的なデザイン学に関する思索へと至っていることが見て取れる。問いの内容を見ると、いかにうまく他者と協働するかというワークショップ参加者目線での問いだけではなく、どのように協働の仕組みをつくり、場を醸成するか、またそもそも協働的デザインというものをどう意味づけるのかという、オーガナイザー目線での問いが多く挙げられた。デザイン学プログラムが始まって6年の間に、我々教員にしても履修生にしても、自ら協働的

■A デザインのビジョンや思想に関する問い

- ✓ デザインにおけるビジョンの在りよう (vol.1 中小路)
- ✓ デザインにおけるビジョンの来しかた (vol.1 中小路)
- ✓ 30年後に〈正しい〉システムの想像と創造 (vol.3 中小路)
- ✓ 「デザイン方法」や「デザインプロセス」よりも上位の、それらをデザインするための「デザイン思想」について (vol.7 北)

■B デザインの実践的方法やプロセス設計に関する問い

- ✓ デザインを行う上での根拠とは何か。 (vol.1 井上)
- ✓ 我々はデザインを行える対象に如何にして気付けるのか。 (vol.1 井上)
- ✓ 方向づけの意思決定はどのように行われるか? (vol.2 長見他)
- ✓ 観察から得られたことをどのようにうまくデザインに生かせるか? (vol.2 長見他)
- ✓ デザインプロセスにおける「感じ」の意味合いおよび活かし方。 (vol.2 北)
- ✓ Can constraints help us generate better ideas? Constraints can be of different types: Time constraints, technical constraints, problem constraints. Which of them can be useful for idea generation, and how can we integrate it in the design processes? (vol.7 Victoria)
- ✓ Is there an optimal solution in the design? (vol.8 Jian)
- ✓ Which stage of the design processes should we consider the culture element? (vol.8 Rachana)
- ✓ What if by understanding design *processes* we are defining it? How can we approach this wicked problem? (vol.11 Luciano)
- ✓ 状況に依存する問題と解をどのように見出し続けるか (vol.11 広瀬)
- ✓ Can the design process make some problems worse? (vol.13 Kensuke)
- ✓ How do we use or tweak the design process in cultures where problems are unspoken? How do students prepare to tackle such problems in society that are unspoken? (vol.13 Kensuke)
- ✓ Can a sense of freedom be achieved without design? (vol.13 Kensuke)
- ✓ How can we design an intervention that can deal with this issue? (vol.15 Agustina)
- ✓ デザインの原動力となるのは「自分から出ること」「興味の赴くままに議論できる場」「信頼できる関係」ではないか (vol.15 大倉他)

■C デザインの記述、表現、伝達の方法に関する問い

- ✓ 意志はいかにモデル化できるのか。 (vol.1 北)
- ✓ デザインの意思決定を可視化することは出来るか。 (vol.1 太田)
- ✓ デザインの対象としての人、行為、関係性をどう捉えるか? (vol.1 山内)
- ✓ 個人の意思決定を完全にモデル化することはできるか。 (vol.2 太田他)
- ✓ 私たちのデザイン行為をどう説明するか (vol.3 佐藤)
- ✓ 見えにくい「システムのアーキテクチャ」や「多面的な評価」といった視点でのデザインをどう理解してもらうのか (vol.9 喜多)
- ✓ 本稿で提案した記述法は、人生や歴史といったプロセスをも記述できるものになるだろうか。デザインと人生や歴史との間にある共通性や差異はどのようなものだろうか (vol.10 北他)
- ✓ デザインという考え方をどうやって人に伝えるか (vol.11 広瀬)

■D デザインの評価に関する問い

- ✓ 広義のデザインの評価軸はどのように立てることが出来るのか。 (vol.1 太田)
- ✓ 誰にでもデザインの質的価値の共有化は可能か。 (vol.1 太田)
- ✓ 専門家による瞬間的な総合評価は可視化出来るか。 (vol.2 太田他)
- ✓ デザイン評価にどこまで非専門家 (ユーザー) が参加できるか。 (vol.2 太田他)
- ✓ デザイン評価を定量的に扱うことはできるか。 (vol.2 太田他)
- ✓ アイデア取捨選択の基準とは何か (vol.5 藤田)
- ✓ 私たちはどのようなテーマを創造的であると判断するのか (vol.5 岡)
- ✓ 複数のデザイン行為を比較するには (vol.9 久富他)
- ✓ デザインを構成する概念のうち定量的に扱える可能性のあるものは何か (vol.9 久富他)
- ✓ 参加者の期待感・満足感をどのように計測するか (vol.10 坂口他)
- ✓ Is there an ideal design process or ideal design school? (vol.11 Luciano)

■E 協働的デザインやワークショップに関する問い

- ✓ 経験の共有や相違が、人々のデザイン活動にどのような影響を与えうるのか (vol.4 阿部)
- ✓ ファシリテーターはどうやって自由な発想を促すか (vol.5 平本)
- ✓ ワークショップの時間的制約をどう考えるか (vol.5 平本)
- ✓ 参加者の能動性を高めるための場のデザインに対して、どれほど多くの人が必要性和危機感を感じているだろうか。 (vol.5 平岡他)
- ✓ ワークショップをやりっぱなしにしないためには、どういう取組みが必要か。 (vol.5 平岡他)
- ✓ 異分野との融合はいかにしうるか (vol.5 藤田)
- ✓ 優れた実施者になるためには何が必要か (vol.6 寺川)
- ✓ 私たちが目指すべき「リーダー」とは (vol.6 寺川)

- ✓ デザイン行為の中での「ワークショップ」という手法の位置づけ (vol.6 北他)
- ✓ デザイン学における「ワークショップ」という手法の位置づけ (vol.6 北他)
- ✓ 産学(官)連携を学生主体でデザインするには (vol.10 久富)
- ✓ 多様な参加者に実施者の価値観を伝えられるワークショップとはどのようなものか (vol.10 坂口他)
- ✓ 組織において、また個人の中で、リーダーシップとフォロワーシップの関係性・コミュニケーションは、どのようにデザインされるべきか。 (vol.11 久富他)
- ✓ 既に存在するリーダーシップに対し、フォロワーシップはどのようにしてデザインされるべきか。 (vol.11 久富他)
- ✓ ワorkshop冒頭をどのようにデザインしますか? (vol.12 北野)
- ✓ 自己紹介にどのような意味を埋め込みますか? (vol.12 北野)
- ✓ さまざまなデザインの方法やフェイズに対する、適正な集団規模について (vol.12 北)
- ✓ どんな人と一緒にファシリテーションをしてみたいですか? (vol.15 北野)
- ✓ 子ども向けワークショップの設計をデザイン学から眺めたらどうなるか。 (vol.15 安藤)

■F デザイン学プログラムやデザイン学教育に関する問い

- ✓ デザイン「学」を学ぶ私たちが獲得する共通のスキルや精神のようなものは存在するか (vol.3 佐藤)
- ✓ デザイン学本科への進学を控えた予科生に対して、新入生合宿が果たすべき役割とは (vol.4 阿部)
- ✓ あなたにとって、サマーデザインスクールの経験とはどのような意味をもつものですか? (vol.5 北)
- ✓ 一研究室の枠を超えた「デザイン学」という環境が我々にもたらしてくれるものは何なのか? また何を実際にやっていくことが出来るのか? (vol.6 大倉)
- ✓ 「デザイン学」の環境がいかに私たちを育んでくれているのか (vol.6 寺川)
- ✓ デザイン学会における京大デザインスクールの位置づけ (vol.7 坂口)
- ✓ 自律性を尊重する仕組み (vol.8 市村)
- ✓ Designing Design School? (vol.8 中小路)
- ✓ デザイン学プログラムの枠を超え、デザイン理論・手法を実践し続けるには (vol.10 久富)
- ✓ 十字の縦軸と横軸、どちらがパースペクティブでどちらがレイヤーであろうか? (vol.14 松原)
- ✓ これまでに京都大学デザインスクールが生み出した最高傑作とは (vol.15 大倉他)
- ✓ 十字型人材の育成はどの年齢、学年から始めるのが効果的か? (vol.15 堀)
- ✓ Does joining the Design School increase students' social activism? (vol.15 Samar)
- ✓ Should design school students learn more about assessing the profitability, feasibility, and scalability of a solution? (vol.15 Samar)

■G デザイン実践やデザイン学の間や設えに関する問い

- ✓ 変態性を露出出来る環境とは何か (vol.5 藤田)
- ✓ 自律性を育てる場 (vol.8 市村)
- ✓ 工房で何をつくるか (vol.8 島田)
- ✓ デザイナーを育てるための空間とアンデザイナーのデザイン教育のための空間は同様のものであるべきか? (vol.8 白石)
- ✓ むしろ工学部に、DCBがほしい (vol.8 服部)
- ✓ 蛇足 大学の規模を大きくするのはいいが、キャンパス移転等により肝心の学生を重要な施設から遠ざけて大丈夫か(キャンパスのデザインは適切か) (vol.11 広瀬)
- ✓ 日本における「デザイン」の実践の場が今後盛り上がるためには。 (vol.12 小椋)
- ✓ あなたの思う「デザイン」の実践の場とは。 (vol.12 小椋)
- ✓ 協議の場においてその環境はどれほどの影響力を持っているのだろうか? (KRP拠点でジャズを流しておけば議論は深まったのだろうか?) (vol.15 堀)

■H デザインにかかわる抽象概念に関する問い

- ✓ デザインとエンジニアリングの本質的な違いは何か。もしエンジニアリングが「失敗」したと認めるならば、デザインはそれを繰り返さないとと言えるのか。 (vol.1 北)
- ✓ デザインとは特別な行為なのか、日常的な行為なのか。 (vol.1 北)
- ✓ 人間中心主義とは? (vol.1 山内)
- ✓ 領域普遍的な創造性はあるのか (vol.5 岡)
- ✓ 創造か、幻想か、 (vol.6 富田)
- ✓ デザインのプロベナンス(design provenance) (vol.7 中小路)
- ✓ 意味があっても価値のないデザイン、意味が無くても価値があるデザイン (vol.7 富田)
- ✓ 目に見えない領域のデザインとは何か? (vol.10 小山)
- ✓ Is it necessary to have a clear definition of *Design* as a discipline? (vol.11 Luciano)
- ✓ 人々が抱える問題や要求の中に共通する「価値」とは何か。そのような「価値」は刻一刻と変化する状況に依存し変化する。それをどのように見出すか。移ろいゆく「価値」をいかに具現化し続けるか。 (vol.11 広瀬)
- ✓ 発展性・進化性とは何から生まれるのだろうか。 (vol.14 松原)

■I 広く社会・文化にかかわる問い

- ✓ 社会をデザインするということはどういうことか? (vol.1 山内)
- ✓ 社会をデザインするための理論とは? (vol.3 山内)
- ✓ そもそも社会とは何か? (vol.3 山内)
- ✓ コミュニティ概念の曖昧さは問題か (vol.4 平本)

-
- ✓ コミュニティをデザインすることは可能か (vol.4 平本)
 - ✓ Culture consists of many elements such as people, religion, language, and so on. Which element of culture has the most influence on the design studies? (vol.8 Rachana)
 - ✓ 文化の異なる国の社会の仕組みから何を学べるか (vol.8 市村)
 - ✓ 社会の制度やシステムをその中でふるまう人の持つさまざまな特性の視点でどうデザインすればいいのか (vol.9 喜多)
 - ✓ Is there a trade-off between design based on common global needs and design based on culture? (vol.13 Kensuke)
 - ✓ 地域での産業とコミュニティの協働をどうデザインするか。 (vol.13 笠原)
 - ✓ 労働生産性のために不便さをどこまで受け入れられるか (vol.14 森)
 - ✓ 観光のためのデータ・情報・知識を地域で共有する仕組みをどうデザインするか。 (vol.13 笠原)
 - ✓ 政策の可逆性を、制度的に保全するにはどんな仕組みを作ればよいのだろうか。 (vol.14 大手)
 - ✓ 多数のステークホルダーが存在する観光地において、地域の便益を最大化するサービス群をどのようにデザインするか。 (vol.14 笠原)
 - ✓ 日本型DMOが欧州のように地域における観光政策実行の司令塔となるにはどのように制度をデザインすればよいのか。 (vol.14 笠原)
 - ✓ データに基づくグローバル観光デザインの方法論の在り方 (vol.15 佐藤他)
 - ✓ 人間性を回復するために必要となるテクノロジーのデザインの形 (vol.15 佐藤他)
 - ✓ What is meaningful work? (vol.15 Samar)
 - ✓ Why do students do volunteer work? (vol.15 Samar)
-

■J デザインの研究に関する問い

- ✓ トレードオフ関係にある諸概念間の調停あるいは突破による、リサーチデザインの方法論。 (vol.2 北)
 - ✓ 従来のデザイン研究から取り入れられるものは何か (vol.7 坂口)
 - ✓ アレクザンダーやデザイン論に限らず、一生の思想的変遷が何らかの学問領域における全体像を映し出すものであれば、その人の足跡は追いかける価値があるだろう。 (vol.9 北)
 - ✓ 即興性の演出について本当に分析できないのか。即興性のデザインには本当にパターンがないのか。 (vol.15 周)
 - ✓ 生活から切り離れるのではなく、デザインの複雑性を直面する分析は、どんなあり方でしょうか。 (vol.15 周)
 - ✓ 研究や学問の面白さと社会課題の解決を結び付けるデザイン学は何か。 (vol.15 安藤)
-

■K 上記以外の多様な問い

- ✓ 「だけでいい」デザイン (vol.1 荒牧)
 - ✓ 循環器をデザインする (vol.1 荒牧)
 - ✓ 客とはどういう存在か? (vol.1 山内)
 - ✓ モチベーションの維持 (vol.4 富田)
 - ✓ あなたにとって「きかない住まい」とはどんなものですか? (vol.6 大倉)
 - ✓ あなたはアーティストですか (vol.11 寺川)
 - ✓ 飛べない鳥は、ただの、何だ? (vol.12 服部)
 - ✓ あなたは何マニアですか? (vol.13 北)
 - ✓ 好まれている文字の形には何か共通点があるのだろうか (vol.14 佐伯)
 - ✓ 文字の形、文字の意味はどちらがより強い印象を与えるのだろうか (vol.14 佐伯)
 - ✓ Do you think this is an important issue? Should we do something about it? (vol.15 Agustina)
 - ✓ 同じ文字でも縦書き横書きで与える印象が異なるのはなぜなのだろうか。 (vol.15 佐伯)
 - ✓ 最も縦長の文字、最も横長の文字はどの文字であるだろうか。 (vol.15 佐伯)
 - ✓ What systems do you use everyday that are unobtrusive? Why are they so? (vol.15 Luciano)
 - ✓ Can you find other reasons for why something would be invisible or familiar? (vol.15 Luciano)
 - ✓ Do you think we are able to use writing systems without thinking about the inherent technology because there's something special about their design or because we are already so used to them? Is familiar really the same as invisible? (vol.15 Luciano)
 - ✓ 書くことと考えることとの間の経時的、同時的、循環的關係性と相互作用。 (vol.15 北)
-

デザインのオーガナイザーを務めたり、イベントを企画・運営をしたりする機会がこれまで豊富にあった。こうした機会を通じ、「デザインをデザインする」というメタレベルでの思考が繰り広げられているものと思う。

デザイン学プログラムに対する問い (F) も数多く寄せられた。プログラムのスタート時に掲げられた理念は当然現在でも息づいているが、この6年の間に履修生や教員によって現場での試行錯誤がなされ、その中で当初の理念の内実が蓄えられ、ときに枠組み自体も再定義され続けてきたと見ることができる。

う。たとえばvol.6の寺川君やvol.11の久富さんの論考では「十字型人才」というコンセプトの再解釈や発展を図り、vol.3の佐藤君や山内先生は「社会のシステムやアーキテクチャのデザイン」という理念を正面から問い直す。では時が経ち、デザイン学プログラムへの問いに対してどのような答えが出たのだろうか。vol.3で佐藤君から挙げられた「デザイン学の共通のスキルや精神」は、果たして見つけれられたのだろうか。vol.6での大倉君や寺川君の問いに対しては、本号vol.15の彼らの原稿がその力強い回答になっているものと思う。

これに関連して、デザインの実践や学問の場や設えに対する問い（G）も、特に米国訪問学習会に関する原稿において集中的に挙げられた。外からの刺激を受けることで、改めて自分のいる場所を問い直している。

Hはデザイン学に関する抽象概念にかかわる問いである。振り返ると「価値」「意志」「愛」「科学・工学・デザイン」「社会」などといった概念が、本誌では繰り返し議論的となった。その「社会」に関して、より踏み込んだ問いがカテゴリーIに並んでいる。表の一番下のKの中には、個々の論考の内容に強く関連する、比較的具体的性の高い問いが集まっている。このような、問いの抽象度のバラエティも本誌の、あるいはデザイン学という学問分野の特徴かもしれない。そしてそのようなデザイン学の研究方法に関する問いがJに挙げられているが、これはおそらく、デザイン学にかかわるすべての研究者が関心をもっているところであろう。

なお、デザイン学にかかわるもっともプリミティブな、かつプログラム外の方から聞かれることも多い問いは「デザインとは何か？」「デザイン学とは何か？」というものであろうが、この問いは直接的には表の中には見られない。ところが実際の論考を紐解けば、デザインやデザイン学とは何であるかを問い、さしあたりの定義や結論を与えている論考は数多い。試みに1年目の3冊だけを見てみても、vol.1では北と井上君、vol.2の長見君、vol.3の佐藤先生や山内先生の原稿において、デザインやデザイン学というものを独自に規定した上で各人の主張や研究を展開している。つまり本誌で行なわれてきたのは、デザインやデザイン学そのものに直接問いかけるよりも、それらの概念が（仮にではあれ）提示する枠組みの中で、各々にとって関心のある具体的なトピックを探求する行為であるようだ。しかしそうした探求をさまざまな角度から行なうことで、再帰的に、デザインやデザイン学というものの輪郭が浮かび上がってきているとも言えるのではないだろうか。

以上、全15号の執筆者や原稿内容と『デザイン学』への問いを概観し、本

誌の歩みを振り返った。やや皮相的なきらいがあり、本誌や各論考の魅力をしっかり引き出せたかどうかには不安が残る。しかし少なくとも、2つの一覧表は本誌の77本の論考へのよい手引きにはなってくれているはずだ。表の中に気になるタイトルや問いを見つけたら、雑誌をめくって当該の論考をじっくり読んでいただくのがよいだろう。バックナンバーを掲載した「デザイン学論考web」は、刊行終了後も公開を続ける予定である。

<http://ronkouweb.design.kyoto-u.ac.jp/>

3. 『デザイン学論考』に関する諸々の経緯や思考

本章では、本誌に関する5年間の経緯や、そこでの検討内容、行なったことなどについて記しておきたい。アーカイブ資料として、今後こうした雑誌を制作する際の参考になればと思うとともに、本誌の創刊や編集の過程それ自体が、何か面白いデザインの営みの記録にもなっていれば、とも願っている。創刊は5年も前に遡るため記憶が曖昧な部分も多いが、当時の打合せ資料やメールでのやり取りも掘り起こしながら、まとめておく。

3.1 創刊に至るまで

デザイン学プログラムが文部科学省のリーディング大学院プログラムとして採択されたのは2012年度後期のことであるが、実際に1期生を迎えた2013年度を含め、立ち上げの時期は相当に慌ただしかったように思う。カリキュラムを整備し、授業がスタートし、さまざまなイベントが動き出した。筆者自身も、KRPと吉田の2つの活動拠点を整備するために奔走していた。教職員はそうした動きに追いついてられながらも、新しい何かを自分たちでつくりあげていくのだという、期待感と高揚感に満ちていた時期でもあったように思う。

2013年度の後期になるとようやく、プログラム全体が少し落ち着いてきた。活動を内外に発信していくための「広報小委員会」も立ち上がり、ロゴマークを定めたりwebやパンフレットをつくったりといった活動を始めた。ロゴマークの作成にあたってはコンペ形式とし、関係教員や履修生から広く素案を募るなど、やはり立ち上げ期に特有の面白さがそこにはあった。本誌も、そうした空気感の中でスタートすることになる。

さて、広報の文脈とは別に、本誌の着想のちょっとしたきっかけとなる出来事が2013年の夏にあった。当時筆者と同じプログラムの専任教員であり、現在は奈良先端科学技術大学院大学に移られた荒牧英治先生が、サマーデザインス

クールにおいて「伝え方のデザイン・『デザイン学』創刊準備号をつくる」というテーマを発案したのである。3日間のサマーデザインスクールでの活動をリアルタイムに取材し、3日目に冊子としてまとめ、それを『デザイン学』という季刊誌へとつなげようという内容であった。筆者や中小路先生もその検討メンバーに加わっていた。結局、サマーデザインスクール全体の運営を担うべき専任教員がテーマワークを実施するのは控えた方がよいという判断によってこの企画自体が立ち消えとなったが、プログラムの活動を内から発信する定期刊行誌という発想は、この後も生き続けることになる。

webやパンフレットを作る中で、筆者にはある葛藤があった。こうした媒体は確かに、プログラムが発足時に掲げた理念や理想を、対外的に、あるいはこれからデザイン学プログラムを志す学生に対して伝えてくれるものにはなる。しかし実際にプログラムを進める中で、教員や学生が何を感じ考えているのかはそこには表わせない。デザイン学という、確固たるかたちが未だ定まっていない学問をテーマにしているのだから、最初の理念や理想を押し通すだけではなく、我々が探索的につくりあげていくという姿勢が必要なのではないか。そのような探求を皆で行ない、そしてその痕跡を着実に蓄積していけるような場があるべきではないか。この考えと、頭の片隅に残っていた『季刊デザイン学』の構想が結びついた。中小路先生や荒牧先生に相談し、広報小委員会などの関係者にも話を通し予算も確保した上で、2014年度より定期刊行誌を発行する運びとなった。

本誌の編集部は広報小委員会の内部組織であるが、本誌はデザイン学の活動を対外的にアピールするような、いわゆる広報誌ではない。むしろデザイン学の内側にいる人間が互いの考えを披露し、議論をすることを第一義的に考えた媒体である。筆者は文学にそこまで詳しいわけではないが、志賀直哉や武者小路実篤らが立ち上げた『白樺』という文芸誌が、本誌を考える際のイメージとしてあった。気鋭の作家たちが集まって自ら雑誌を編み、それぞれに作品や評論を自由に発表する。その中でいつしか「白樺派」と呼ばれる一つの流派が形成され、戦前の日本文学界を席卷したという。

3.2 雑誌としての枠組みづくりと創刊号

コンセプトを探ったり、予算を押さえたりするのと並行して、2013年の年末ごろから雑誌のタイトルやフォーマットの検討を始めた。似たような試みをしている大学紀要や、美しいと思える雑誌や自費出版誌などの前例をリサーチした。当時のメールを探てみると、創刊号の一発目に掲載されることになる筆

者自身の原稿のドラフトを2013年度内に既に、先行的につくっていたようだ。具体的な掲載内容や体裁のレベルにも落としながら、全体の枠組みをつくりあげていった。

ただし雑誌名については、試行錯誤がほとんどなかったようである。手元に残っている打合せ資料には、仮タイトルであった『季刊デザイン学』ⁱⁱを除けば『デザイン学論考』以外のタイトル案が見つからない。よほど直感にマッチしていて、検討チーム内の合意も取れていたのだろう。英語版誌名の『Discussions on Studies of Design』の検討においては、中小路先生や、当時東京大学におられ後にデザイン学に合流された山本恭裕先生に、大いに頼った。

次に原稿の体裁について。本誌は、デザイン学プログラムの関係者が自由にかつ熱を込めてデザイン学を語るという、何よりもまず中身によって勝負するべきものである。しかしその勝負のためには、雑誌の見た目も大事だと考えた。執筆者が自分の原稿が載ってうれしく感じるような、また読者にとっても読みたくなるような体裁にすることが、中身の充実に貢献すると思われるからである。社会の大きな仕組みをデザインしようという観点は重要であるが、その実現の方法論としては意匠デザインも欠かせない要素になると筆者は考えている。

だから当初は、外部の書籍デザイナーに委託することや、彼らがレイアウトソフトとして愛用する「Adobe Indesign」を使用することも検討していた。しかしそれでは、予算や時間のかけ方として過剰すぎるし、使える人が限られるようなソフトを使っては編集の小回りもきかなくなる。そこで執筆者と編集委員が自前で編集作業ができ、かつ見た目にも美しいようなフォーマットを模索することになった。そうしてできたのが、「Microsoft Word」を用いた現状フォーマットである。MS明朝・MSゴシックなどの標準フォントを使いながら、余白や図表の入れ方、タイトル部分などに一工夫をこらし、「論文集」でも「報告書」でもなく、「雑誌」と呼びうるような体裁を目指した。フォーマットの末尾には「『デザイン学』への問い」のコーナーを設けたが、その狙いは前章の冒頭に記した通りである。何を書くべきかわからないという意見や、論考全体が問いなのではという意見もあったが、編集長の独断で押し通させていただいたⁱⁱⁱ。

誌面の大きさは手に取りやすいB5版とし、用紙は黄なりの色とざらざらとした質感がどこかアカデミックな雰囲気を醸す「クリームキンマリ紙」を採用した。大学関連の印刷物を多数手がける株式会社エヌジーピーの松村氏に相談し

ⁱⁱ そういえば企画段階でいつの間にか、「季刊」ではなく年3回の発行になっている。原稿集めや編集作業の大変さや予算を鑑みると、年3回としたのは賢明な判断だったと思う。

ⁱⁱⁱ 他に、特に読者に薦めたい参考文献の表紙写真をページ右側の余白に入れるという案など、いくつか没になったアイディアがあった。

ながら、予算なども勘案して決定した。

このように雑誌のコンセプトやフォーマットを探る過程によって、原稿応募要項^{iv}はあらかじめ固まってきた。二重投稿や著作権などに関する規定の文言を先例に倣って作成し、応募資格や応募方法を定めた。原稿の内容やページ数に関しては、ほとんど制限を設けていない。そのことで、論考の多様性を担保しようと試みた。

あとは表紙である。毎号の統一感を持たせ、作成の手間もそこまでかからないように、同じモチーフの写真を使うという案があった。そこで筆者がたまたま研究対象として撮り溜めていた地面の写真に、白羽の矢が立った。2009年頃の『建築雑誌』^vが建築の壁や設備配管の写真を毎号の表紙にしており、そのイメージも筆者の頭の中にあった。何十枚もの候補をつくり編集部で相談しながら、表紙のイメージを固めていった^{vi}。

これらの大枠の模索と同時並行で、創刊号の制作が進んでいる。創刊号では編集部メンバー（中小路先生、荒牧先生、北）が自ら筆を執った他、FBL/PBLなどを通じて筆者と親交のあった山内先生や1期生の太田君、前年度の欧州への視察に同行してくれた1期生井上君らに内々に声をかけた。すぐに快諾いただき力のこもった原稿をお寄せいただいたばかりか、各々の原稿に対してメール上で活発な議論が交わされ、全体の質が大きく向上した。特に山内先生や筆者の原稿を題材に、「サービス」「ユーザー」「意志」や「デザイン」といった概念をえぐるような議論がなされていた。筆者としては大変勉強になり原稿を大きくアップデートできたし、山内先生にも研究のいいステップとしていただいたようだ。太田君の原稿は先に述べたように附属図書館ラーニングコモンズの実現に至る過程を追ったものであるし、井上君のその名も『デザイン学論考』という原稿は、デザイン学と自身の研究、欧州視察で得た学びをクロスオーバーさせた大作でありながら、どこかユーモアも感じさせる一本である。表紙写真にも、その欧州視察中に撮影した「Duisburgの地面」を採用した。

雑誌にしろイベントにしろ連続した企画は一般的に、その一発目がシリーズ全体の質を大きく規定する側面がある。本誌のクオリティも、創刊号の執筆者メンバーの尽力に支えられているところが大きいということを、今になって改めて実感する。

^{iv} http://ronkouweb.design.kyoto-u.ac.jp/p/blog-page_27.html。本号の巻末にも掲載しておく。

^v 日本建築学会編：『建築雑誌』。日本建築学会、2007～2009。

^{vi} 最初はベースのかかった（斜めから撮った）地面写真も含めて検討したが、検討の末、真上から撮ったものに限定することになった。

3.3 毎号の制作プロセス

創刊号を経て、本誌は一応の軌道に乗った。

本誌の応募要項には、原稿はいつでも投稿できる旨が記されている。ただ、刷り上がった本誌を読者に発送する際に打つお知らせのメールに原稿募集の文面があり、それに応じて投稿の意思を示してくださるというパターンが大多数だった。発行のすぐ後に、次の号に書きたいという立候補のメールが筆者宛に舞い込んできて、編集長として勇気づけられた記憶がある。

年3回の発行時期は7月末、11月末、3月半ばをベースとし、各号には少なくとも3本の原稿は掲載したいと考えていた。ただしこの時期は柔軟に考え、3本の原稿が集まるまで待ったり、執筆者と編集部双方にとって納得のいく出来になるまで粘ったりしながら、発行を延ばすことも度々あった。3月の発行に限っては予算執行の都合上、スケジュール厳守でお願いした。原稿がコンスタントに集まらない時期も正直なところあり、本誌の一つの課題であった。もう少し多くの方に、本誌の魅力をお伝えできていたらよかったのだが。

概ね、発行月の前月末あたりを初稿の〆切として設定した。執筆者から初稿が提出されてから最終原稿の確定に至る過程においては、創刊号で培われた対話的な風土が生き続けた。提出された原稿をそのまま掲載するのではなく、編集部メンバーから執筆者に対してフィードバックを行なったのである。レイアウトや誤字脱字についてはもちろんのことであるが、論考の内容や構成についてのフィードバックが大部分を占める。特に学生の手稿に対しては、なるべく早めにドラフトを出してもらった後に丁寧に内容を確認し、何通もメールを交換しながら、より伝わりやすく、本人にとっても価値のある論考にできるように手助けをしたつもりである。対話を続ける中で、荒削りだった原稿がどんどんと洗練されていった。面白い考察が加わっていったり、論考の中でキーになる言葉を見つけそれに対する論述の厚みが加わっていったり、そもそも何を狙ってその原稿を書いているのかが明確になったりもした。執筆者と編集部メンバーとの間での背景、価値観や立場の違いから、何が伝わらないのかがわかったり、着目する点や面白いと思う点が異なっていたりといった、多数の発見もあった。

この過程では通常の論文のチェックのような、論旨の厳密性や先行研究との関連づけなどを厳しく問うことはあまりしなかった。その代わりに、デザイン学に関する自らの考えをしっかりと盛り込み、単なる報告ではなく「論考」となるよう執筆者に依頼した。本誌は気軽に何でも書けるように見えて、その自由度の高さゆえに、定型的な論文よりも執筆が難しい側面があるかもしれない。

一本の論考を仕上げていく過程そのものが、曖昧な状況の中で何を求めるかを自ら定め、質の高いアウトプットをつくり出すという、典型的なデザインの営みであると言える。そのプロセスに参画することは、編集部メンバーにとっても大きな喜びであった。

各自の論考が仕上がってくる段階に入ると、掲載順序を編集部で検討する。個々の原稿のボリュームや読みやすさを考慮して配置したり、内容が似たもの同士を並べてみたり、編集部として読んでほしい原稿をトップに出したりするなど、号ごとにいろいろな判断材料で決定していった。そしてすべての原稿を1ファイルに統合し、もくじと巻末部分をつけて、本文ファイルは完成となる。

表紙については、筆者の手持ちの地面写真から候補を大量につくり、編集部で検討を重ねた。発行の度にその号の表紙を逐一検討するのではなく、3号ほど先までの見通しを立てた上で、決定していった。一年のサイクルを意識して、7月頃に発行の号はグレー系、11月頃のもの茶系、3月頃のものは緑系の色の地面写真を採用することにした。このことに気づかれている読者は多くはないと思うが、お手元の15冊を並べていただければ我々の密かな狙いに気づいていただけるものと思う。

印刷は、前述したエヌジーピー社に依頼した。本文と表紙のデータを入稿すると、翌日には校正原稿が届けられる。それを後述する寺川君や森君とともに目を通し、細かなミスや図表の見づらい部分^{vii}を見つけて修正する。意外と単純なミスが見つかることもあり、胸をなで下ろす（それでもミスが残ることがままあり、執筆者に対して申し訳ない、やりきれない気分になる）。そして最終稿を入稿し、1週間ほどで待望の論考が納品される。その手触りを確認し、ページをパラパラとめくってみた後に、寺川君や森君、デザイン学サポートメンバーの力を借りながら袋詰めし、本誌は読者の皆様の元へと旅立っていく。

3.4 編集部メンバー

このような本誌の制作は、心強い編集部メンバーに支えられた。

中小路先生には構想段階から常に相談をさせていただき、本誌の骨格を一緒につくりあげていただいた。刊行後も、各論考の執筆者に対してたくさんのフィードバックをしていただいた。特に我々が何気なく使っている言葉の意図や論理性を鋭く問い質す先生の態度には、筆者としても身が引き締まる思いだっ

^{vii} 印刷のドットが粗いので画像データの扱いには苦勞した。ただこの最終号の段階になって、エヌジーピー社に最新の印刷機が導入されたそうで、一気に画質が向上した。あの粗いドットの味を懐かしく感じる気分がなくなっている。

た。筆者が苦手としている英語表現に関しても、適切な助言をいただいた。自由な編集方針の中でも本誌が一定の格調を保つことができたとすれば、それは中
小路先生のお力によるものである。また、創刊からわずか1年半で本学を去られ
ることにはなかったが、『季刊デザイン学』の発案者である荒牧先生の存在も大き
かった。

創刊号では筆者自身が手を動かしてレイアウトをつくっていたが、vol.2を前
に、この作業を補助してくれるアルバイトを履修生から募ることになった。す
るとすぐ翌日には、2期生の寺川君が手を挙げてくれた。研究に忙しい中で貴重
な時間を割いて、レイアウト作業や誤字脱字の修正、出稿前の原稿統合作業、校
正時の最終チェックなどを完璧にこなしてくれた^{viii}。それだけではなく彼は、
執筆者が学生であろうと教員であろうと原稿に対して率直な感想を述べ、とき
には鋭い指摘をしてくれて、非常に頼もしかった。そして彼の博士研究が佳境
に入ると3期生の森君がその役割を引き継ぎ、寺川君同様に美しいレイアウトを
こまめにつくってくれている。本号vol.15の130ページを超える大作は、森君の
献身的な努力なくては完成しえなかった。彼らの仕事の精度の高さは、緻密な
設計や作業が求められる機械系の人の特質なのであろうか。ときに原稿がなか
なか送られてこずヤキモキしたり、ときにべ切に終われ土日も作業したりしな
がら、最終号まで走りきってくれた。二人の貢献に敬意を表し、肩書きだけでも
「学生編集委員」を名乗っていただくことにした。また寺川君から森君への引き
継ぎ時期には、5期生の松谷君にも手助けをいただいた。

筆者自身は編集プロセスの全体を統括し、執筆者と編集部をつないだり、印
刷会社や事務職員との折衝をしたりもしているが、旗振り役にすぎない。むし
ろ論考の執筆者として、編集部メンバーの的確で創造的なフィードバックの恩
恵に大いにあずかった者の一人である。

さて本稿は、編集部を代表して筆者が筆を執っているが、他の編集部メンバ
ーに対してもできるならば、本誌に対して抱く思いを書いてほしいという依頼
をしていた。すると寺川君から、しっかりと言語化できるほどには消化しきれ
ていないからまとまった文章は書けない、という条件つきながら、本誌に関す
る思いが箇条書きで送られてきた。その内容が大変面白かったので、本人の許

^{viii} 実は寺川君は、筆者が作成した原稿フォーマットとは別に独自の長大な編集マニュアル（図表の配置方法、漢数字と
算用数字の使い分け、執筆者とのやり取りに至るまで）を作成し、森君や松谷君と共有してくれていたらしい。その
ことを本稿の執筆時に初めて明かされ、筆者は驚かされた。
また今になってvol.1を読み返すと、レイアウトの細かな点（章節の前後の行間、全角と半角の使い分け、webページ
へのリンクに対する下線の有無など）が現在とは随分違うことに気づいた。寺川君や森君の感覚が反映されていると
ともに、筆者自身の好みも変わってきていると感じる。

可を得た上でここにそのまま掲載しておく (tab.3)。

tab.3 寺川君のメールより

寺川君は編集者でありながら同時に執筆者でも読者でもあり、おそらく本誌という媒体を最大限に楽しんでくれた学生の一人だと思う。この箇条書きの項目を見ていると、編集者・執筆者・読者という3つの立場での考えが循環し、ときに混じり合っていることが如実にあらわれている。異なる立場から眺めることでそれらの間に相乗効果をもたらす、一人三役のコラボレーションとでも言えようか。思えば筆者自身も、そのような態度で本誌に接してきたことに気づかされる。また彼の言葉の端々に、本誌に対する愛情が感じられて嬉しい。愛をもってデザインをすることの重要さは、本号の彼の論考でもやはり語られていた。

3.5 デザイン学論談

執筆者と編集部メンバーは密なコミュニケーションを取りながら、常に互いに学び合う関係にあった。しかしそうしてできあがった論考に対する読者の方々からの声はなかなか届いてこないということを、編集者としても執筆者としても、筆者は感じていた。頑張って論文を執筆しても周りから反響がなく、引用もされずに寂しい気分になる経験は、研究者なら誰でもあるだろう。逆に読者サイドとしても、何か疑問や感想をもったとしてもそれを執筆者に伝えることは難しい。

そこで、本誌の原稿の内容をベースに、多くの執筆者や読者が実際に顔を合わせて意見を交わす場をつくることにした。それが「デザイン学論談」である。本誌創刊から1年を経た後に開始され、これまでに3回実施した。各回の報告はvol.4, 5, 7にそれぞれ掲載されているのでご参照いただきたい。それまでに発行されていた本誌執筆者の中から事前に発表を募り、当日は発表者が話題提供を行なった後に自由に議論がなされる。デザインファブリケーション拠点のステージの上に円環状に椅子を並べ、立場の違いを超えてフラットに話ができるようにした。実際に第3回では、ある学生が教員に対して激しく問い質すような場面も見られ、対等な議論を象徴するシーンとして今でも印象に残っている。

それなりの意義はある試みだったと思うのだが、惜しむらくはこのイベント

- ✓ 思いの丈を満足ゆくまで書き表すことができるのが論考という場の魅力。その快感・達成感は、通常の論文執筆や普段の研究活動だけでは出会うことができない。すべての著者の方にそんな思いが溢れ出す経験をしてもらう後押しをすることが編集者としての目標だった。
- ✓ 文章それ自体には決まった形がない。それゆえ、文章を「読ませる」形に仕上げるには編集者としての責任を感じた。
- ✓ 思い返すと「きれいにレイアウトしてもらってありがたい」というお声を多く頂いたように感じる。今更ながらそのことに気づき、言葉も出ない。
- ✓ 全盛期には、編集作業上の必要もあり、1本の原稿を最低5回は読んでいた。作業前はしんどいと思うこともあったが、一度読みだすとこれが時間を忘れてしまう。
- ✓ 先生方と学生の原稿の差。先生方はさすが隙のないプロの仕事であり、学生は皆個性あふれる文章であった。また学生と一括りにしても、学年が上がるにつれ文章の上手となっていくのがよくわかる。そんな違いが愛おしかった。
- ✓ そういえば、書類等で論考のことを何と表記すればよいのか(雑誌? 冊子? 広報誌?) 悩んだ経験が度々あった。
- ✓ 実は一切レイアウトされていない原稿も、レイアウトまで頑張っていたいただいた原稿も、編集時の労力はさほど変わらなかった。でも気合の入った原稿をもらえると嬉しくなるし、できるだけ意匠を活かしたいと取り組んだつもりである。
- ✓ 編集委員というバックグラウンドを意識すると、様々な場面で安心感を得られた。
- ✓ 著者として関わる時、投げた原稿にどんなコメントを頂けるのだろうかというワクワク感がいつもある。やはりそれは論考への信頼感があってこそ。
- ✓ 応募資格の「関係者」について、今回森田さんに共著をお願いするにあたり少し懸念材料になった。
- ✓ 過去に参加させていただいたPOとの意見交換会でも論考、特に学生執筆者がいることへの言及があった。実はこれが自分でも論考に投稿してやろうと思ったモチベーションの一つでもある。デザイン学への恩返しに少しでも役立っていたら嬉しい。

が2016年5月の第3回を最後に開かれていないことである。開かれていないというより、筆者が「開いていない」と言う方が正しい。自身の怠惰を恥じるとともに、本誌の発行のように「年に〇回開催」と決めてしまえばよかったという思いもある。開かれた全3回は時期的にも1期生・2期生のみが発表者だったが、論考執筆者が6期生にまで広がるようになった現在このイベントを行なえば、少し違ったものになっただろう。また「論考」と「論談」とをもっと一体的に考えていたならば、「論考」「論談」それぞれの立て付けは少し違っていただかもしれない。

多主体のインタラクシオンを通じて学問や文化といったものを醸成しようとする場合、いかに議論の双方向性を担保するかということは、重要な課題だろう。特に本誌のような紙媒体の場合、その仕組みづくりに工夫が必要になる。必ずしもイベント開催というかたちを取ることもないかもしれないが、いずれにせよ、今後個人的に考えてみたいテーマである^{ix}。

3.6 対外的発信と評価

これまで述べてきたように、本誌は主にプログラム関係者を対象とした内向きの雑誌であるが、いくつかの対外的発信も行なった。

一つは「デザイン学論考web」である。このwebには雑誌の発行と同時に原稿をアップし、バックナンバーとして蓄積していく。雑誌は白黒印刷となってしまうがwebはカラーで掲載でき、雑誌版を補完する役割もある。学術的成果としてしっかり見せられるよう、原稿ファイルには書誌情報も付した^x。

ただしこのwebは、本誌をインターネット上で広く知ってもらおうというよりはアーカイブとしての役割が強く、本誌の読者を主な対象と想定してつくられている。先に述べた対外的発信の意味合いは弱い。それよりも2016年度末より開始した本学の学術情報リポジトリ「KURENAI」での公開^{xi}の方が、より外部を意識したものであると言える。このようなサイトでの公開は創刊当初は考えておらず、リポジトリ事業を展開する附属図書館の北村由美先生からのお誘いを受けてのものだった。しかし本誌の内容がプログラム内だけではなく、広く公開するだけの価値のあるものだということを附属図書館側でも編集部側でも認識し、それまでの論考の執筆者にも同意を得た上で公開へと進んだ。本学の学術的成果として今後も残り続けるという意味では、アーカイブとしての安心

^{ix} そういえば、筆者が主導した唯一のFBL/PBL「共創プラットフォームの研究と構想」（2016年度後期）は、この問題に取り組んだものであった。実習の成果は、履修生たちにより学会発表されている。山口直人・小東茂夫・藤村暖・丸尾優子・白石晃一・山口純・北雄介：大学院実習科目における共創プラットフォームの研究と構想，知識共創，Vol.3，pp.1-7，2017。

^x 他に、個々の論考の内容に関してディスカッションする掲示板機能をつけていた時期もあったが、公開されたオンラインでの議論は盛り上げるのが難しく、早々に廃止した。「デザイン学論談」がその役割を担うことになる。

^{xi} <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/218082>

感もあるだろう。

本誌の活動に対し、内外から評価をいただく機会も少しばかりあった。2018年春の国際デザインシンポジウムでは履修生が自ら企画してプログラムでの学びについて議論する「Design School Student Session」が開かれたが、そこで何人かの学生が壇上で本誌について言及してくれたのは、編集長として大変励みになった。またプログラムに対する文部科学省からの調査などの際には、本誌が学外の調査員の先生方の目にとまり、デザイン学という学問分野をボトムアップに構築しようとする試みとして望外の評価をいただいたことを覚えている。

3.7 そして最終号へー

本誌は、プログラムに対する補助金の終了や編集部を担った教員の退職に伴い、本号をもって最終号とすることになった。

それを惜しむかのように本号には過去最多となる11本もの論考が寄せられ、ページ数も大台の100をはるかに超えた。11本のうち履修生からのものが8本で、そのうち2本（佐伯さん、Agustinaさん）はプログラムに入って間もない6期生の学生によるものである^{xii}。一方でもっとも年上の1期生の論考も2本あり（堀君、北野さん）、そのうち北野さんの論考は、本誌初となるプログラム修了生によるもの。そして巻頭に掲載した、2期生3名を含むアーティファクト研究会の論考は、単独の論考としても過去最多のページ数で、彼らの5年間の活動を振り返ってくれた。どの原稿も独自色が強く、プログラムでの実習やワークショップに基づく論考が一本もないというのも、何か示唆的である。

最終号にして最大のボリュームとなり、野心的な論考も多数寄せられたという状況を見るに、本誌の役割はまだ終わっていないかという寂しい気持ちがこみ上げないわけでもない。しかし、デザイン学というものを真剣に自分たちの言葉で考えようという風土は、本誌がなくなった後もたくましい履修生たちによってしっかりと受け継がれていくのではないかと、筆者は信じている。

表紙の地面写真は、これまでの14号では撮影地の場所性などは考慮せず、筆者がそれまでに撮影してきたストックの中から純粹に絵として美しい、面白い写真を、グレー系～茶系～緑系のサイクルで選んできた。しかし今回に限っては、至極恣意的に撮影地を選び、新たに撮り下ろした。この写真の場所も本プロ

^{xii} 他に、投稿を検討したものの断念した6期生も2人いた。

グラムの拠点としては6年間の役目を終えるが、ここで培われたデザイン学の風土もまた、人の中で生き続けていくのだろうか。

本号制作の追い込みが行なわれた2月前半は修士論文や博士論文の提出時期などとも重なり、過去の例になく原稿が渋滞気味であったが、執筆者各位には粘り強くアップデートいただき、編集部としても森君を中心に気合いを入れて臨んだつもりである。全15号の集大成にふさわしい一冊に仕上がったのではなかろうか。

以上、本誌の創刊や編集などの経緯や舞台裏をまとめてみた。筆者個人の編集長としての力不足を感じる側面も多いが、この媒体を通してたくさんの方と協働し、あるいは意見を戦わせることができ、非常に学ぶところが多い5年間であった。個人的には、何らかの機会を捉えて本誌を復刊できればと密かに目論んでいる。もしご賛同いただける方がいれば、お声がけをいただけると幸いである。

4. 謝辞

本誌は、たくさんの人に支えられてここまで歩んできた。何よりもまず本誌は、執筆者そして読者の皆様のご尽力と熱意の賜である。数多くの玉稿をお寄せいただき、またさまざまな方から叱咤激励をいただいた。そして先にも述べたように、強力な編集部メンバーに恵まれた。広報小委員会の各委員や、デザイン学コーディネーター、歴代のユニット長などの先生方からも多大なご理解とご支援をいただいた。発送作業や予算調整の際には、デザイン学のサポートおよび事務の方々のお力もお借りした。印刷においてはエヌジーピー社にお世話になり、無理難題を幾度となく聞いていただいた。

以上、この場を借りて深く感謝を申し上げたい。デザイン学というものについて思考し、また実践していく上で、本誌が少しばかりでも貢献しているのであれば、編集部一同にとってこれ以上ない喜びである。

「デザイン学」への問い

+ 書くことと考えることとの間の経時的、同時的、循環的關係性と相互作用。